

熾盛 SIJOU

2025/12
152

真宗大谷派 専龍寺報

光の中で一人でいるより、闇の中で友と歩きたい

ヘレン・ケラー

I would rather walk with a friend in the dark,
than alone in the light.



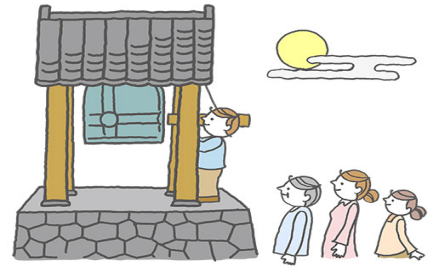
専龍寺 永代経法要

12月9日(火) 9:30 読経・法話 13:00 読経・法話

【おとし 両日とも12:00】

講師 松岡洋之さん(山口県萩市 永照寺住職)

響流十方(こうるじっぽう)



正覚大音、響流十方

(しょうがくだいおん こうるじっぽう)

と、お寺の鐘(かね)には刻まれていることがあります。

大無量寿經の言葉で、「正覚の大音十方に流る」といい、「仏のさとりの世界が十方という、すべての世界、すべての人に響きわたる」という意味です。岐阜県の住職である四衝亮(よつつじあきら)さんは、こうおっしゃっています。

ただそれは、その教えを説く声が大音量で、どこでも聞こえるということではありません。それだとどうしてもだんだん距離が遠くなれば声が小さくなり、聞き取りにくくなることも起きます。それに仏さまが世界の真ん中で大きな声で叫んでいるというのもおかしいことです。

詩人の谷川俊太郎さんの「みみをすめます」という詩に、「ひとつのおとにひとつのこえに みみをすますことが もうひとつのおとに もうひとつのこえに みみをふさぐことに ならないように」という一節があります。

力まかせに他をねじ伏せようとする太い声や強い立場の大きい声や世の大勢に同調する声ではなく、その声にかき消されそうになる小さな声や、大きな力の前に身を縮めて耐えている声に耳をすまし、その声に聴えて届くのが、十方に響いて流れるということです。

戦火の中で銃弾に向き合う人にも、大きな壁に遮られて外から見通せないところにいる人にも、社会や周りの人から取り残されて孤独だと感じている人にも、病を得て不安で心細い思いにとらわれている人にも届くので十方に響くと言われるのです。

除夜の鐘は、煩惱の数の108回を鐘つきし、煩惱を払い、新たな年を迎えるといわれています。

自分が居心地がよく、自分中心で満足した生活の中で生活するなかで、気づかなくなっている世界があると感じます。

居心地の良さ、満足は、それぞれの、煩惱、欲を満たしているだけではないかと思います。

「充実した人生」「悔いのない人生」「幸せな人生」とは何なのでしょう。

この「正覚大音、響流十方」は『嘆仏偈(たんぶつげ)』というお経の「偈(うた)」にあり、その最後にはこうあります。

「たとひ身を、もろもろの苦毒のなかにおくとも、わが行精進(ぎょうしょうじん)して、忍んでついに悔いじ」

(【訳】たとえこの身が、様々な苦しみの中にあっても、この一生ただただ歩み、受け入れて、ついに後悔しません。)

「忍」(受け入れる)とは、我慢して受容することではありません。この身と心におきたことを、そのまま引き受けていくことを意味します。

南無阿弥陀仏の声を聞くと、どうにもならないわが身を知らされます。同時に「懺悔(さんげ)」という申し訳なさとともに、これまで気づかなかった他の存在、世界に気づかされるのでしょう。だからこそ、そこに「ともに生きんとする」阿弥陀仏の願心が、私にも願いとなってくるのだと教えられています。

南無阿弥陀仏を申すことは、苦難の人生を生きる私に、「ともに生きん」と願いがかけられ、どこまでも、いつまでも、耳底になり響きつづけるのです。

(住職 記)

永代経とは



みなさんは、どのような心持(こころも)ちで、永代経(えいたいきょう)を迎えられているでしょうか。

永代経は、亡くなった方への追善供養(ついぜんくよう)ととらえられがちです。しかし、真宗門徒は、亡き人を追善供養の対象としてではなく、「諸仏(しよぶつ)」といただいてきました。

「死」という悲しくも厳粛(げんしゅく)な事実をもって、私たちも必(かならず)死にゆく存在であることを教えてくださり、そしてお念仏の教えに生きるご縁を結んでくださる「仏さま」と受けとめてきたのです。

遠い昔から途切れることなく、いま私たちにまでお釈迦さまのご説法が届いて

いるということ。それは、お釈迦さまの教え—お念仏の教えに生きてこられた無量無数の方々の願いのあらわれといえるでしょう。

「永代経(永代読経(どきょう))」というご法要は、亡き方をご縁として、お念仏の教えを自(みづか)らがいただきなおす大切な開法(かいほふ)の場であります。

脈々(みゃくみゃく)と受け継がれてきた法の灯火(ともしび)を絶やさないよう、縁あるものが互(たが)いに志(こころざし)をはこび、永代にわたって教えと教えを聞く場が相続(さうぞく)されていくことを願ってつとめられるのです

リーフレット『永代経』
(東本願寺出版)より

2026年 令和8年 年忌 法要のご案内

ご門徒の皆様へは個別にご案内申し上げます。連休、土日などご予約されます場合、寺までお早めにご相談ください。

一周忌	令和 7年	2025年	逝去
三回忌	令和 6年	2024年	逝去
七回忌	令和 2年	2020年	逝去
十三回忌	平成26年	2014年	逝去
十七回忌	平成22年	2010年	逝去
二十三回忌	平成16年	2004年	逝去
二十七回忌	平成12年	2000年	逝去
三十三回忌	平成 6年	1994年	逝去
三十七回忌	平成 2年	1990年	逝去
五十回忌	昭和52年	1977年	逝去

年末・年始のご案内

【歳末参りと除夜の鐘】

専龍寺では、年越しでの鐘つきは行っていません。

本堂へのお参りや、鐘つきは、日暮れまでに、ご自由にお越しく下さい。

【年初めのお参り】

修正会(本堂での年始おつとめ)

1月1日 13時

1月2日 10時 13時

上記時間以外にも、例年通り、またご帰省の皆さまと、ご自由にどうぞお参りください。

今月の言葉より

闇の中で友と歩きたい ～朋友(ほうゆう)とwith a friend～

住職がかつて幼き頃、周りの人びとは、友のうち親しい友やいつも連れあう友を、「朋友(ぽんゆう)」と言っていたように思い出します。中国語の発音であることや、浄土真宗でも大事な言葉であったのは、後々わかっていきました。「朋」「友」について、お話の中でこう聞いたことがあります。

「朋」とは、もともと貝がらがお金の役割をしていたころ、貝に糸を通しつるしぶら下げた形であること。そこから、一つの糸で大事なものをつながれた関係を、「朋」というそうです。

「友」というのは、右手と右手をかさねた形であること。そこから同じ志の物が手を取り合い、歩むことだそうです。

「悲しみは、人と人をつなぐ糸である。」(藤元正樹)という言葉もまた、「朋」をもとに話されたのかもしれないと思います。悲しみは誰もが抱く感情で、生きれば生きるほど、心の奥底にそそがれ続けるからこそ、人と人を結んでいくのでしょう。それを大事にしたのが、真宗門徒の皆様であったと、有縁のお姿とともに憶(おも)いおこされてきます。

【御礼】 専龍寺同朋婦人会の皆さまに仏具のお磨き、境内清掃をいただきました。まことにありがとうございました。

浄土真宗寺院では、報恩講が一年の区切りです。仏具の輝きも戻り、また一年の始まりです。

【お詫び】

先月号151号の印刷ミスにより、上下さかさまになっていました。

外注先への住職の指示間違いでした。

熾盛(しじょう)

熾盛とは、火が燃え盛る様子をいいます。

阿弥陀仏のすがたは光明熾盛とあらわされ、その願いは、罪惡深重・煩惱熾盛の衆生をたすけんがためと説かれています。

人は、つながりのなか、気づかぬままに、はてしなく罪惡を重ね続け、いまここに生きています。

その存在を悲しみ、慈しみ、寄りそい、ともにあろうとし続けるはたらきを、「阿弥陀」といいます。



専龍寺HP



東本願寺HP

発行日 2025年12月1日

発行者 専龍寺

〒699-3671

島根県益田市津田町561

Tel・fax 0856-27-0020

mail: iwamisenryuji★gmail.com

★は@マーク